

紙田 彰

「Super-string Theory」シリーズ
油彩作品展（第9～17回）で展示した詩と断片(抄)

[2005.8～2007.1]

(境界のない絵)

——2003.9 二度目の個展前後

境界のない絵を描こうとして考える。

ひとつは、物質と物質の間に果たして境界があるのかということ。

もうひとつ、作品は境界によって囲まれているが、これは作品が世界を切り取ってできる断片ということではなく、位相が異なった場所から覗いているから、境界めいたものがあるような按配になっているだけで、実はこれは境界ではない。

つまり、位相と位相の間にはたして境界があるのかということである。ここにきて、では境界とは何であるかという問題が浮上してくる。

境界とは区別する／せざるをえないときに出現するものだが、そのときこちら側とあちら側は区別されているのだろうか。

物質が永遠にその外殻を壊しながら「区別」の内部へと辿る、その先の結論は、空であり、無であるとする、その区別、すなわち境界は無へと向かう道筋を作っていることになる。

つまり、境界、あるいは枠は、こちらとあちらを行き来する通廊なのである。

その通廊はあちらともこちらともつかない、曖昧に混淆した「両存在」とでもいうべきものなのだ。

そうすると、あらゆる独自存在は、あらゆる全体と一気に結合する宇宙包含とでもいうべきエネルギーをもっていることになる。

独自存在は核融合反応のように、境界を貫通することができるわけである。

[作成時期] 2003.09.26

(作品 “Super-string Theory” についてのメモ)

1次元対1次元に収斂されるということ。

すべての次元を1次元に折り畳むとすると、基点と全体との対峙となり、包含関係が消失する。その1次元は多次元を畳み込んでいる。

宇宙と内部存在を求めることは同じことで、これを同時に実現しているのは行為である。

ミクロの宇宙論とマクロの宇宙論という同一の問題を、人間存在は肉体的行為でつなぎとめている。

この肉体的行為という原初性。

ここから、細胞・DNAから量子論的な電磁気力まで下る存在の基点へと思考をめぐらすことができる。

それは、その地点から立ち上がる解放衝動が何を突き抜けていくのかという問題でもある。

11次元の宇宙論をそこから掴まえられるかということ、1次元 vs. 1次元。

生きかつ思考する。

美術とは作品をいうのではなく、この行為に意味がある。

作品が物質的に永遠ではないのだから、したがって作品に向かう技術も現実性も評価さえも意味はないのだし、まして美術作品とは行為の一方であるから、問題はあらゆるアートの底にある行為と思考をつなぐもの、解放衝動自体にあるといえる。

第9回“Super-string Theory”展にて

息を吹きかけたとき

奥行きがあるように見えるが、向こうは平坦で、向こうの歴史の光が異なるだけで、つまりは時間の凹凸が色の違いをもたらし、奥行きと見せている。

だが、私の見る奥行きは、私の視覚の反応時間、すなわち脳の反応であるから、内部に距離の構造を作っている。

そこでは、向こうは平坦ではなく、空間を認知しているのである。

だとすれば、「私」から見た場合、奥行きは確かに存在している。つまり、私の内部に奥行きが存在しているということは、宇宙が鏡面であって、内部が実在であるという逆転も考えられる。

そうであれば、まさしくキャンバスという平面は宇宙そのもの、コズミック・ミラーという側面があるのではないか。

平面に平坦な平面を重ねていくという行為はまぎれもなく創成の業、光の創造であるのかもしれない。

すると、描き手の私は、キャンバスの向こうから見たときに、視ることのできない一点、始まりの string の一振動となるのかもしれない。

息を吹きかけたとき、生命は漲る。

2005.9.26-10.1 第 10 回個展にて

(選択的実在というはがれか)

選択的実在というはがれか
幾層ものめくれからこぼれていく
ときには あまりに緩やかに
あるいは 過激なまでに劇的に

点よりもわずかばかりに長さのある
そのことが発端であるのか終端であるのか
削除であるのか密封であるのか
隠蔽それとも新たな複合

断じて侵されてはいけない
この手が体が思考が
平面を色彩を刻印を
次々に実在させていく 解放していく

それは 宇宙を磨いているに違いないのだ
鏡のように磨いて
その中に体を入れていく
光の先が開じるまで

(作品について)

広大な影がたち現れる。あるいは遠ざかっていく。

その建物群のような集積する影は歴史そのものであるのか。過去そのものであるのか。私は影の中に蠢くひもを描いてみた。揺れ動く、律動する、沸騰するそれらの環を。

それらは落下するようにも思われるし、永遠にとどまるようにも思われる。しかし、一瞬にして位置と形を変える。

次に記憶の残り香とでもいうような橙色の空間を重ねてみた。水蒸気のように立ち上がる性質をもっているのか、それとも降りつづく疲弊したガス——。重くたちこめる粒子たち。

そのとき、こちらの絵には量子が選択され、向こう側の絵には量子は出現していない。

私は、二枚の絵をひとつに描いている場合の量子と別々の相似するものとしての絵を描いている現実の二枚の絵として、自ら選択しているのか。光は片方では省略であり、もう一方では光のスリット。

現れた量子の見えざる向こうには、別の次元の空間が映っているのか、閉じこめられているのか、光に反して、光のゆきつく先が思われるのである。

第 12 回個展で

ビッグクランチ
「宇宙音楽」の事象地平

僕は mica のように
剥がれ落ちるべきものが好きだ
か細い線、透明な薄片、かすかな光
ある種の記憶のような

僕は mica のように
重なりつづけるものが好きだ
色彩がとどこおり 消えてゆく平面
忘れうべき記憶のように

近づいて裸眼で凝視すべきである
重層するプレパラートに
複雑な罅割れが生じ
僕は閉じ込められる

幾多の異相が 本当は一つであるように
こちらに光があるのか あちらに光があるのか
物質は存在するのか しないのか
僕はそのあわいの事象地平ビッグクランチで押しつぶされる

第 12 回個展にて

恐るべき瞬間の時間サイズ

第14回展「 10^{-36} 秒」に寄せて

僕らはある日、ミクロの時間についてよく考えてみなければならないのかもしれない。

僕らは時間を、僕らが生きてしまった規模で捉えてしまいがちだが、時間そのものが生きてしまっている規模からすると、それすらも実在感のない小さなサイズである。

けれども、時間そのものの量と物質の出現という関係から見ると、僕らの感覚する時間はあまりに大雑把で、巨大すぎる。

僕らは時間について考えてみると、時間の方向と量のベクトルを離れて、無限点になりえない瞬間というミクロの時間サイズを取り出してみる必要があるのかもしれない。

宇宙のすべてを一点に結合させていたエネルギーが分岐するこの時点の時間量が、ここから始まる宇宙の全時間量を包含しているのだとすれば、この恐るべき瞬間の時間サイズこそ、思考という物質の素因のひとつとして、ついには匿されている時間次元の実体を示すことに……。

「ある日、ミクロの時間を……」改題

無限点について

物質（エネルギー）が無限点になりえないということは、思考すら実在していなければならないということだ。なぜなら、実在が存在論の起点だからだ。

また、思考の実在が物質の実在を保証しているということが考えられる。次元は実在しているかどうかはわからない。これは見る側の視点であって、見方の問題であるからだ。

次元は外側、つまり包括的な視座があるとして、ここから見るときは超-単純化された次元（0次元、あるいは1次元）であろうし、構造の内側から見るときは構造の入れ子の数に比例して超-複雑化された次元になっていくであろう。これは、天動説と地動説の問題である。

時間も次元であるから、その大小は相対的である。否、超-相対的であるといえる。

ということは、方向性も「無限にあり無限にない」、つまり実在していない可能性もある。

だから、これらの問題はただに存在が実在しているか否かということにつぎるのかもかもしれない。

[作成時期] 2006.09.06

実在というプランク・サイズ

光速度がゼロであって、次元の塊がマイナス方向に移動していると考え
ることはできないだろうか。

次元の塊は光の実在する範囲にしか実在できない「見方」ともいえる。
また、光そのものが実在の範囲であるということ。この塊が物質である
のかもしれない。

さらに、物質とは実在、つまり光の存在（物質＝エネルギーの存在）を
示すのだから、実在の範囲の外は実在についての論及の対象外（ありえ
ない範囲）ということになる。

このように、物質を「見方」によっては次元の塊であるとすれば、この
塊（単位量）は、静止した光の容れ物という範疇で次元に分解された塊
分のエネルギーを持つ。この塊のサイズは光の粒子より細分化できない
から、光を擦り抜けることはできない。つまり、光粒子の壁にぶち当た
る。

[作成時期] 2006.12.09

次元のかたまり

多次元は「 n 次元, $[(n-1)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」という2次元でイメージできる。または、「 n 次元, $(n-1)$ 次元, $[(n-2)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」という3次元イメージで考えられる。日常世界では3次元までのイメージしか具体性を喚起しないので、この2次元イメージと3次元イメージで高次元の座標を示すことになる。

「 $[(n-1)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」、 $[[n-2)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」はそれぞれ多次元を1次元のかたまりとして表現したものである。

「 n 次元, $[(n-1)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」は2次元座標であり、「 n 次元, $(n-1)$ 次元, $[(n-2)\text{次元}..1\text{次元}]$ 次元」は3次元座標ということになる。

つまり多次元は、方向性を持たないあるかたまりと、ある方向を持つ線的かたまりとに押し込めることができる。

総合的にみると、すべての次元は次元のかたまりとみることが可能である。

また、さらにつきつめて、1次元座標系というものを想定すると、すべての次元は1次元の線のかたまりになり、この方向のサイズをゼロに近づけるとゼロではないかたまりとなり、座標のスケールそのものをゼロに近いスケールに縮めると、あらゆる次元を示す範囲が単一のかたまりとして示され、次元という分解能（見方）と次元自体がそれぞれ、物質と同じようなかたまりの性質を持つのではないかと思わせられる。

2007.1.2

* WEB サイト「紙田彰の世界」では美術作品のほかに、詩作品なども公開しています。

紙田 彰 Akira Kamita

〒1340087 東京都江戸川区清新町 1-1-22-105

Tel 03-3686-5915

akamita@naoe-ya.co.jp

www.naoe-ya.co.jp/ryokuji/
